

「何を使うか」ではなく「どんなケアが必要か」を考える 認知症の人が心地良く過ごせる空間を作る福祉用具

認知症の人が福祉用具を使うことは、本当に難しいのでしょうか。上手に使っても
認らうための工夫を考えます。



取材協力 ▶ **太田 智之さん** ● 医療法人財団健和会補助器具センター 作業療法士

おおたとゆき
作業療法士。病院や在宅、施設サービスなど、法人グループにおける住環境整備支援に従事。介護保険、
障害者総合支援法の枠組みでの福祉用具や補装具、住宅改造のプランニングにかかわる。

人も含めた環境が生活に影響

——認知症の方が福祉用具を使えるのか、認知症を持つ家族がいる私としては、とても不思議なのですが。

認知症の方にとっての福祉用具は、モノとしてあるだけでは片手落ちだと考えます。ソフト面での働きかけ、たとえば声かけや習慣化へのプロセスがあることで、初めてその機能が活かされて、福祉用具としての役割を果たせるようになるものです。福祉用具を介した支援で失敗したとき、何が足りないのかを振り返ると、結局そこが足りなかったことが多いです。

——それは、とても腑に落ちます。

その方が何に困ってどんな行動をとるのか。それには本人なりに理由があります。認知症の方は、記憶障害や見当識障害などの中核症状を抱えながら、自分が持つ最大限の力で周りの状況を知覚し、自分なりの対応を試みています。そのため周囲の状況や態度によっては、不安や焦燥感が生まれ、それによる行為が周辺症状として出現して、生活での困難さが生じます。周辺症状は環境の影響による二次的な症状のため、地域やシステムによって周辺症状が強生じ、それが問題行動と捉えられてしまうこともあれば、まったく周辺症状が出ずに穏やかに過ごせたりもします。

——具体的にはどんなことでしょうか。

私の事業所のある足立区柳原地域のような下町では、多少の認知症特有の行為を目にしても、違和感として排除しない、コミュニティとしての懐の深さがありますよね。困っていそうなら挨拶と共に自然と声かけもしますし。そこには地域住民による緩やかな見守りの風景があります。

——まあそういう人もいるよね、という感覚ですね。

その地域に住む人の態度が影響していると思いますが、地域によっては認知症の方の行為が問題行動という形のレッテルを貼られるなど、ハンディキャップを負うことも少なくありません。かかわる人も含めた環境が、生活にかなり大きく影響してくるということです。その場所の社会的な規範やルールみたいなのが、たまたまその方の振る舞いとうまく合致しなかった場合に、特別な存在として扱われ排除されてしまう。このようなことは認知症に限ったことではありません。その延長で考えると、認知症の方への福祉用具支援も、道具単独でケアが成立することはあまりないと思っています。

——道具だけではなく、人の手が必要だと。

認知症の方が福祉用具を使うときには人の手が介在しないとうまくいかないという実感はあります。その前提のもとでお話ししていきます。